

第3回富山県文化審議会 議事録

日時：令和8年7月30日（木）

15時～17時

場所：富山県民会館 401 会議室

■議事

次期計画の骨子案の修正案について

【長澤会長】

それでは議事を進めさせていただくので、よろしくお願いいたします。

前回の審議会は1時間半ほどだったが、今回は2時間いただいている。それでも議論をしていくと時間がなくなってしまうので、円滑な進行にご協力をお願いしたい。

本日は、前回に引き続き新たな県民文化計画の策定についてご審議いただく。

初めに、事務局から次期計画の骨子案の修正案、前回からアーツカウンシルというものが出ていたが、それらをどのように考えてやっていけばよいか、ということ踏まえた修正案について説明をいただく。

そのあと、委員の皆様にご意見をいただきたいと思うので、よろしくお願いいたします。

【事務局】

配布資料に沿って説明（約20分）

【長澤会長】

新しいものが出てきた感じがあるかと思うが、基本的にウェルビーイングということを県が掲げて、審議会では新しい文化振興政策を考えて、令和9年から施行していくような形で答申をまとめてほしいという諮問が寄せられている。

30歳くらいから富山県政には関わりを持たせていただいているが、今まで捉えてきた芸術文化や文化芸術がドラスティックに変わってきている。ここ2～3年の動きでいうと、生成AIが誕生してから、専門性に対する危機感を踏まえた新しい構造改革や意識改革、業界ではマインドセットを変えないといけないと言われている。実際にはそこをカバーする団体、あるいは支援するグループが、すでにちらほら海外を中心に動き始めている。年内くらいにはいろいろな団体が出てくるのではないかなと思う。

分かりやすいというと、デジタルトランスフォーメーションというものが、アートの一つの表現の中の基幹技術の中に出てきているということ。一方で、時代がそうなったときに、新しい情報社会みたいなものにみんなが飲み込まれていくのではないかなという不安もある。ところが、面白いことに、人間が絵を描く、人間がそれに接するというようなことの重要性が逆にクローズアップされており、極めて難しいハンドリングをしないといけなくなっている。

そんな中で、今日皆さんにどういう風にお示しして、議論を進めればよいかということ事務局と何度もやりとりをした。たたき台として皆さんにお示しするのがよいのではないかなとい

うことになった。それが今事務局に説明してもらった内容になっているということ。

重要なポイントがいくつかある。アーツカウンシルについて、県に調べていただいたものを踏まえて言うと、アーツカウンシルというのは、ある種の協議体である。

我々が今これから答申としてまとめていく方向性や具体策の対象が、どこにどういう風に存在しているのかが分かっていないことに気がついた。これは藤井委員が以前おっしゃったとおり、10人いれば10人のアートがあるという発言はまさにそのとおり。

固まりを作ってもらって、それを行政として面倒を見るという今までのやり方は、手っ取り早い方法ではあった。ところが、多様性が出てくると個別にやっているものをどうやってカバーしてあげればよいのか。実はその中にもものすごい可能性を秘めたことがたくさんあるが、ひょっとすると取りこぼしてしまうかもしれない。どうやってカバーするかという議論を事務局とした。

そんな中で出てきたのが、ACTとTACの二重構造というもの。私の方でもう一度資料2の10ページの解説をさせていただきたい。

過去2回の文化審議会でアーツカウンシルという言葉が出てきていたが、これは誰を相手に何をするのかということを考えていく母体、いわゆるプラットフォーム的なもの。それが組織されていたり、見えているという状況があまりなかったりするので、分からないというのが正直なところ。私自身、そういうものが必要だということは分かっているが、誰を相手にどうするのかということが見えない。それを考えていくと、トヤマアーツカウンシル(=TAC)が面倒を見たり、いろいろな指導をしたり、助言をしたりするような、その対象になるものをアーツコレクティブトヤマ(=ACT)という、誰でも入れる一つの大きな塊にしようというアイデアが出てきたということ。これをACT(アクト)と呼んでいる。これはネットワーク方式。SNSや情報ネットを使って加盟していただいて、その人たちがアクセスしやすい状態にする。

いわゆるプロや専門の表現者の団体というのは全国各地にたくさんある。それらは加盟人数が増えない。作ったときはみんな元気だが、何十年も経ってお年寄りになって、若い人たちが関心を持たない。せっかく良いことをやってきたが、元気がなくなっていくみたいなこともあったり、何も起こらないということが起こったりということが全国各地で起きている。

一人一人がやっていることが、もう今までの定義の中で収まらないという状態になってきている。どうやってカバーしようかということ。大きな括りを持ってこない、我々が一生懸命考えたことを伝えたり、その問題を吸い上げたりといった場がないということに気がついた。そこで、事務局と意見交換をさせてもらって、アイデアを出した。

見える対象がはっきりしていればよいが、どんどん新しいものが生まれているときにどうするかというと、一つは、個人であっても自発的に参加できるような、ドアを開けた広がりを用意して、そこに関心があったらぜひ参加してくださいという形の場所を作る。それをどんどん大きくする。時間がかかると思うが、知事もおっしゃっている、いわゆるウェルビーイングの一つの雛形。

それを運営するためには審議機関が必要なので、具体的な機能を決断したりするような組織としてのアーツカウンシルというものが、ACTをきちんと采配していく二重構造で成立すれば、富山県は後進県の状態から新しいところに一步出てくるかなと思う。

我々の富山モデルはこういう形で作っていけばよいのではないかと思います、たたき台にしてい

る。

この資料を見ると、いろいろなことが想像できると思うが、皆さん全員のご意見をお伺いしたい。

【武内委員】

文化芸術という分野において活動者を包括するような団体を作ろうと思ったときに一番ネックになるのが、どれくらいそれを理解して所属してくれる人がいるのかというところ。いろいろな団体があるが、芸術家さんなどの団体から話を聞いていると、あえてそういうものに所属はしていないとか、その活動団体があるのは分かっているけれども、いろいろな大人の事情やしがらみがあって入らないというようなことを聞く。

ACT というものを組織する上においては、いろいろなことに配慮しなければならないと思う。ACT を作る際には、今いろいろな活動をしている人たちにインタビューしながら、ACT のようなものが、費用的なものも含めて、どういう形でどう運用するのかということや、どういう組織体であるべきかということ、うまく形作ればよいのかなと思う。

私自身、いろいろな方と関わって話を聞いていると、一人でやっている人が多いとか、どうしたらよいのか、進め方が分からないというようなことを言う方が多い。

ただ補助を受ける側としてではなくて、自分の活動にどう活かしていけるのか、その活動を通してどういう広がりが生み出されるのか、県民や市民にどう還元をして文化度を上げていくのか。県全体のウェルビーイングがどうやって上がっていくのかという大きなテーマに向けて、ブレずに進めていくことが重要なのかなと感じた。

【西島委員】

学校現場としてどのように関わることができるかという観点から考えると、私が所属する富山県高等学校文化連盟は、主に文化部に所属する生徒を対象に支援を行っている。そのため、文化部には所属していないものの、文化芸術の分野で意欲的に活動している生徒については、十分に支援が届いていない部分もあると感じている。

そうした生徒が ACT に関わることで、新たな発表や活動の場を見つけることができればよいと考える。一方で、若い世代が ACT に参加するためには、どのような手順を踏めばよいのか、また誰がその窓口となり案内していくのかといった点について、学校現場からは分かりにくさがあると感じた。

【藤井委員】

ACT は資料を見ただけでは複雑そうに感じる。だが、一つ一つを見ていくと、そんなに難しいものではないのかなとも思った。

先ほど、長澤会長から「10 人いれば 10 人のアートがある」という話をしていただいた。なぜ私がそう言ったかということ、カルチャー教室で自分が持っている思いを伝えることは簡単。ただ、結果としては大変怖い話で、一緒に泳がざるを得ない。泳ぐようにするというか。そうすることで、最初は分からなくても、こっちも無理強いしないまま見守っているうちに、言葉を発するようになってくる。私の知る範囲のものではなく、知らない世界がそこに出てくる。そ

うしたときに、もうすでにその人はアーティストになる。自立した人間になる。そこに価値があるのではないか。その人が持っている本質的なものが生み出されて、本人が気づいていく。それを私たち人間界でどうやって生かしていくかということ。カルチャー教室も、様々な感性や個性が交差するところといえる。

【宮崎委員】

ACT について、各種団体の集合体、プラットフォームで、個人でも誰でも参加できるということだったが、会費が必要なのがよく分からない。

【長澤会長】

そういうプラットフォームみたいなものをどう考えるかだが、既存のいろいろな芸術系の団体については、今伊東委員がやられているような、芸文協という大きな組織がある。

ACT がすくい上げようとしているのは、そういう団体に入りたくないという人とか、西島委員がおっしゃったように、文化部などの部活に所属していないけれど、実は芸術系が得意だという人、あるいはみんなで作るのは嫌だが、一人で活動している人。学校の部活に入っていないくても、ACT に入ればよいという場合もあり得る。

会費についてはこれから考えること。まだ決まっているわけでもない。

【宮崎委員】

そういった状況であれば、ACT があって助成していただけるならよいと思うが、個人で一生懸命やっているすごい人に対して会員になってくださいということになると、会員になりたくないと思う人もいるのではないかと思った。

【長澤会長】

そういう人もおそらくいるだろう。

【米田委員】

私自身も作家活動として、富山県内の無所属という形でずっとやってきているが、自分と同じような立場の人とかいろいろな方がいらっしゃる。そういう人が社会との関係性を持てるような、何か間に入るものがあればよいなとは思っていた。

資料2の10ページのイメージ図を見させていただいて、なるほどと思った。

私の捉えた解釈では、TAC は駅であって、駅の中で電車を準備したり、目的地を準備したりという役割を担い、ACT がホームなのかなと。ホームに入ってくる人は、自分の意志で入ってくる。そこにはヒエラルキーなどとは関係なく、みんながそこに参加することができるということ。団体ではなくて、緩やかなネットワークというイメージが近いのではないかという気がした。これはかなり新しい取組み。すごく良い取組みになるのではないかと思う。特に、富山のいろいろな分野のごちゃまぜ性みたいなものとすごくリンクしていて、富山のイメージに結構当てはまっているのではないかなという気がした。大変興味深く感じた。

【三宮委員】

私としては個人で活動するアーティスト、特に若手アーティストが気になるところ。ACT に参加したときに、若手アーティストさんにとって、何らかのリターンや利益があったほうがよい。もっと活動してみようという契機になると思う。

イベントなどで関わっている若手アーティストさんに、出品料や謝礼をお支払いできないが展示させてもらえないか、といった心苦しいお願いをしたことがあった。そういった理不尽なお願いではなくて、お互いにウィンウィンになれるような、ACT でのご紹介などができたらよいと思う。

今はアーティストさんや演者側に話が集中しているような感じもするが、県内の美術館や各種ギャラリー、文化会館、ホールなどにも入ってもらって、その人たちに個人のアーティストさんに、作品を展示してくださいとか、展示できますよとか、場所代はこうですよとか、少し割引できますよとか、プラスマイナスのところを調整していただくようなことができればよいと思った。双方、利益を生み出せるようなものになるのがよいのかなと思った。

【佐部利委員】

文化芸術活動を活性化していくにあたって、いろいろなお世話をできる組織があるとよいかなと思う。それがアーツカウンシルということになるとすると、時にはいろいろな活動などを結ぶハブになったり、時にはお金を出すバンクになったり、いろいろな使命を持つのかなと思う。

教育や福祉と関わっていくという側面もあると、よりウェルビーイングとして関わっていけると思う。

例えば、今回の県美術館の展覧会は非常に子どもが見ても楽しめる美術展だったが、学校での利用度はどのくらいなのかなと思った。そういったときに、美術館を使う調整に動いてみたりとか、ときには商店街や青年会議所とタイアップしながらアート活動を展開していくとか。個人の活動について言えば、アーティストとしてやっていくには、作品がたくさん売れない限りは、やはりアートフェアやアートビエンナーレに行きたいと思うもの。そうした活動を後押しできるような情報を蓄積したり、各地でやっているアーティスト・イン・レジデンスに派遣できるような情報を提供したりできればよいと思う。そうやって外国人も富山に来てくれるようになれば、もう少しグローバルな状況も生み出せるのではないかな。

アーツカウンシルがあって、いろいろなものが関連付けられたり、お金を生み出せたりするようなこともできるのかなと思う。

ACT は、資料の図を見ると囲ってあるように思うが、長澤会長のお話を聞くと、いろいろな才能を見つけたり、繋がったりしながら蓄積されて、まさしく米田委員の言われる、緩やかなネットワーク的なイメージであるならば、そこに属したくない、みたいなことは起こらないのではないかな。

アーツカウンシルも良いことをやっている人がいないかなと探すし、そういう人が団体に入るといったイメージよりも、活動をより豊かにしていくというところで情報を重ねていくようなイメージで、まさしく米田委員が上手に表現された緩やかなネットワーク。そういったイメージであれば面白いかなと思う。文化芸術はそういった動きでイメージできるかなと思った。例

えばそこに、祭りや「おわら」などを関わらせていくとなると、どのような形が考えられるのかなと思った。

【清原委員】

事務局でアーツカウンシルの先進事例を調査されているが、アーツカウンシルは様々な組織形態がある。国の文化審議会でも、アーツカウンシルは助成金の審査配分に限定されずに、文化行政全体の中でいろいろな役割を担うことが期待されるとしている。県においても、アーツカウンシルを作る際には、県の文化芸術政策全体の中で、こういった機能を担わせるかを考える必要がある。

この審議会では、文化芸術政策の基本的な方向性を定めて、具体的な事業は予算編成の中で検討するとしていたかと思う。計画の策定を受けて、実際にどのような事業を打ち出していかという、全体像が見えている段階で、アーツカウンシルについての議論になっていけばよいのかなと思った。

その上で、資料2の10ページのイメージ図について、ACTのような幅広い分野の関係者が集う場を作るとは、いろいろな連携が生まれる可能性が広がるので、非常に有意義だと思った。文化芸術、伝統工芸だけでなく、さらに経済界や福祉、観光、教育、まちづくりといった分野まで広がれば、さらによいのかなと感じたところ。

芸術文化だけでなく、伝統工芸も含めていろいろな団体があるので、屋上屋になるよりは、先ほど米田委員がおっしゃった、緩やかなネットワークの場を形成するというイメージがよいのかなと感じた。

ACT という文化芸術団体のアーティストの集合体の中に助成金を審査する機関が設置されているが、そうすると助成金の対象となりうる団体や個人が組織する団体の中に、助成金を審査する機関があるということになる。助成金の観点で言うと、公平性について疑問を感じる。

また、助成金の対象がACTメンバーに限られるという点においても、公平性の観点から疑問に感じる。一般的に、アーツカウンシルは助成金を公平に専門的な観点で審査するものと思っているので、助成金の対象は団体や個人の属性に縛られないものだと思う。アーツカウンシルとしての助成金の対象に何か属性をつけるのであれば、県内で活動する団体や個人とか、そういった縛りや属性くらいかなと思っている。したがって、ACTメンバーに支援を限定するアーツカウンシルに、少し疑問を感じている。

ACTとTACを別々に整理検討する必要があると感じている。いろいろ課題はあると思うので、関係者のご意見をお聞きしながら、伴走支援や助成金も含めて、こういった支援が必要かを検討すればよいのかなと感じた。

【内山委員】

なぜアーツカウンシルが必要なのかが、いまいち分からないと感じている。

資料2の10ページの上の部分に「伝統から新たな表現まで多様な文化芸術を誰もが楽しめる環境を創出する」というのは、とても大事だなと思っている。その目的を考えて、ACTのような団体があって、どういう機能だと助かるかなと考えた。

PTA、児童クラブ、公民館などで行われる行事とかをお母さんたちはこどもに体験させたいと

思っているけれども、誰に頼んでよいか分からないから、それぞれでたくさん調べている。ACT に登録している人たちをリスト化したものやホームページなどで紹介してもらうのはとてもよいことだし、そのことで富山のアーティストとの関連ができるとよいなと思った。

アーティスト側としては、ACT で何をして欲しいのだろうと考えてみると、発表の場が欲しかったりすると思うので、県や自治体が場所を貸してくれるとか、こういうイベントがあるから参加してみませんかということとか、県に放映をしてもらいたいなどというときに、お手伝いしてもらおうとよいのかなと思った。

PR は、今の時代は自分で SNS をやろうと思えばできるので、団体である必要は特にないのかもしれないと感じた。PR をするために、県の機関がやっていく必要があるのかなと疑問に感じた。

アートは過激なものがあったり、いろいろな自由な発想があるので、県がやるとなると、公平性みたいなものを求められたときに、両立できるのかなとも感じた。

他の委員が言われたように、例えば踊りとアートと何かが合わさったら、いろいろな変化が生まれて、新しいものが生まれるかもしれないということに関しては、とても面白いと思った。

【伊東委員】

せっかくの機会なので、資料に沿ってお話したい。

資料 1 の 3 ページのⅢについて、タイトルに「文化芸術」という言葉が使われている。確かに国の法律がそうになっているのだが、文化庁の場合は、文化財の保存も含めた文化芸術ということ。第 1 回の審議会のときに、その種のもの含まないということをおっしゃったので、今回、文化芸術という言葉を使うと整合性という観点でやや疑問に感じた。文化計画としてもよい気がした。

3 ページでは、いくつか意見を申し上げた、ふるさと富山についてや、Ⅰ（２）②富山を舞台とした特色ある文化芸術の振興、Ⅰ（４）①文化芸術がつなぐ交流の輪、Ⅱ（１）③ふるさと教育の推進、Ⅱ（３）地域とともに取り組む文化芸術活動の推進、Ⅲ（２）②特色ある文化芸術活動への支援、（３）の文化財を含めて、意見を取り上げていただいたことに、感謝を申し上げる。

4 ページについて、複数の委員の意見が書いてあるので必ずしもそうではないのかもしれないが、（１）①の二つ目の項目で、「歴史的な評価を受けている分野だけでなく」との記載があるが、歴史的な評価を受けている分野とは何かと思う。単純に言うと文化財に見えてしまう。この場合は、文化財を指しているのではないと思うので、表現に対する見直しが必要。「だけでなく」は「に加えて」という意味があると思うので、そういう配慮をお願いしたい。

5 ページについて、（２）②を加えていただいたのはよかったと思うが、この事例に挙がっているものは限定的。例えば、この間作品発表をした「万葉高志の国」の越中万葉の舞台や、とやま世界こども舞台芸術祭での様々な取り組み、舞踊団体の「立山まんだら」という作品など、評価できるものがあるので、そういったものにも目配りをいただきたい。

6 ページについて、「ユニークベニュー」はやはり分かりにくいという印象。

7 ページについて、（４）①の分野間の交流や国際交流は、富山の芸術文化を今まで刺激的に発展してきた創造の大きなきっかけであるので、そういったこともぜひ目配りいただいて、計

画に書いていただきたいと思います。

9 ページについて、(3) は、こどもたちが単に体験したり鑑賞したりするだけでなく、こどもの芸術活動の支援がとても重要だという意見も申し上げたので、ぜひこどもたちの創造性を伸ばしていただきたいと思います。10 ページ (2) ②特色ある文化芸術活動への支援についても同様。

12 ページについて、用語説明を入れていただいたが、「ユニークベニュー」や「コレクティブ」は難しいと思った。

後ほど出てくるコレクティブはおそらく個人の集合体みたいなものなので、組織ではないということの出発点だろうと思うが、説明上では何となく組織のようなニュアンスだった。そこをどうするのかということは、最後に言葉づけを考える必要があるかと思う。

資料2について、アーツカウンシルはいろいろな困り事に対する課題解決型の、助言というよりも相談窓口のような相談機関みたいなもの。あるいは、前回の審議会でも長澤会長がおっしゃったように、富山の活動をもっと県民や県内外、海外に広めていくような、情報周知に役に立つ役割である。

先ほど発言された清原委員と同じ意見だが、上から芸術文化人を審査するみたいなことだと、どうして上から言われなくていけないのかということになる。例えば、県外審査員のような外部審査員を迎えたときに、本当に富山の实情や富山の芸術家たちの努力や取組みが分かったうえで審査されるのかという、危惧を感じた。

6 ページの「想定される機能」について、相談窓口や情報周知のプラットフォームはよいと思うが、助成事業として、内容を審査して助成先を決定するとなったときに、審査する人選は、現場を分かっている人が本当に入っているのか。目的は何なのか。例えば一つの目的として、本県の文化の担い手をこれから育成していくということに本当に繋がっていくのかどうか。実績をしっかりと見ていただいているのか。本県の場合は、全国に比べて相当な芸術文化の活動をしてきている。そういった横の繋がりなども含めた事業実績が消失されるような危惧を感じた。これまで積み上げてきた基盤の上に、さらにすくい上げていくというような組織立てが必要と感じた。

8 ページについて、先行事例がいくつかあったが、本県は分野間の交流、国際交流、こどもの活動の支援など、かなり特色がある。そういった役割について、どのように関わっていくのかなと思った。少額の支援なども確かに必要かもしれないが、本当に県としてやることなのかどうか、検討の余地があると感じた。

10 ページについて、芸文協は ACT にどのように関わっていけばよいのか。ACT は振興対象を網羅するというような記載があるが、ACT に入らないと助成対象にならないのか、というようなことも懸念されるので、そういった懸念が取り除かれるように、今後、本県ならではのものを協議して作り上げていくことが必要ではないかなと思う。

11 ページについて、目指す姿として「県民・こども」と記載があるが、鑑賞と親しむだけでなく、こどもたちが活動を通して成長していくことをぜひ書いていただきたいと思います。

アーツカウンシルの導入にあたっては、今まで作り上げてきたものを基盤にして、さらに新たな人、新たな力、これからやろうとしている人が入り込めるような、何かプラスなやり方ができればよい。そこには、組織や団体に限定するよりも、目的に応じたやり方があればよい。

そういったことをこれから検討すればよいかなと思う。

【青柳委員】

私は京都在住だが富山市で生まれ育ったので、何か私にできる事で、富山県の芸術文化の活性になればと考えている。

これまで県展の審査員や実行委員、越中アートフェスタの審査員などもさせていただいた中で、受賞されている方々はとても勉強をされて作品制作にもかなり力を入れて来られていると思うが、特に展覧会などに参加されていない方々もいろいろな分野でそれぞれ地道に努力されているかと思うので、ACT がそういう方々の受け皿になって、富山県にはこんな素敵なアーティストがたくさんいるのだと広く紹介して知ってもらえるようなプラットフォームになればよいのではと思っている。

アーティストがそれぞれ方向性が違うように、受け取る側のニーズもまちまちだと思うので、ACT に登録してもらって、今回の県の事業はこんなテーマで開催するから、こんな方々に参加してもらってコラボしようとか、こういう人に出てもらったらいろいろな感動を与えられるのではないかと、こういう人が出てきてくれたらよいなというような、その時の目的に応じたイベントが富山県の中でできたらよい。富山県はすごいな、富山県はこういう人たちもいるのか、こういうすごいイベントもあるのかと思ってもらうことが、富山県出身者としても誇りになる。富山県はすごく文化や芸術に力を入れている県なんだよと、私はあちこちで言っている。素晴らしい建物もたくさんあるし、文化財に指定されるような素晴らしいものもある。そのあたりに関して、もっと一般の人たちも関わるような場になっていったらよいと思っている。

【島添委員】

アーツカウンシルを作ることを前提として議論することが今回の目的であると理解してこの場に出席しているのだが、他の委員の意見をみるとアーツカウンシルの設置を前提とした議論になっているように思えず、今回の会議の論点がどこにあるのかよく分からない。そこで、一つ確認だが、アーツカウンシルを作ることを前提にして、どのようなアーツカウンシルにするかということを議論するのが今日の目的と理解したが、正しいか。それともアーツカウンシルを作るか作らないかというところからの議論か。

【事務局】

本県に設置するとしたら、どういうものが県の実情としてふさわしいかということ。

【島添委員】

作るか作らないかというところからの議論か。

【事務局】

作るか作らないかも含めての議論。

【島添委員】

資料2の10ページのイメージ図について、長澤会長のことをよく存じ上げているわけではないが、非常に野心的なコンセプトだと思った。つまり、いろいろな集団や個人も含めて、いろいろなレベルの芸術、あるいは文化と言われているものを価値づけせず、フラットに捉えた上で、そこに対して何らかの支援をする、あるいはいろいろな金銭的、マンパワー的ないろいろなチャンスを作るという形で支援するという点では、かなり野心的だと思う。コスモポリタンのというイメージ。

基本的なコンセプトはよいと思っている。今まで委員の皆さんがおっしゃっているところとしては、運用の部分に対しての疑問、質問、懸念というものが挙がっていると思うが、この場で今回議論するのはどこまでなのか。どこまでのレベルを固めるのが今回のこの場の目的なのか。

【長澤会長】

知事からこの審議会に対して、県の文化行政の進め方に関する具体的な案を出すことを諮問されており、この審議会に皆さんに議論してほしいと考えた。そういった議論の中で新しい施策に絡んでくるようなアイデアを皆さんからいただければと考えている。そしてその新たな施策について具体的にどういう形でやっていくかということを、具体的なイメージもなしに「こんなのあったらいいと思う」とだけ投げかけても議論が進まないのでは、イメージ図として書き添えたところである。

我々が文化を前に進めていくにあたって、どこまで目配りをするかということだが、「会員」と言うとイメージが少し違うが、まずは「この中に入って、何か言わせて」という人たちの集まりを考えている。こういった具体的なイメージがないと、広く県民みんなをアーティストに見立てて、私たちは何かやるんだという話にしかない。

芸文協のように、いろいろな芸術文化団体をメンバーに入れてやってきている組織もあるが、特定の団体に属していない人たちもたくさんいる。そういう人たちも ACT に入ってもらえればよい。他にも、「自分はプロのアーティストじゃないけれど、いろいろな人と知り合いになりたい」という人に入ってもらいたいのもありだと思う。

これまでのコンペは「技」を競うものが一般的であったが、近年は「デザセン（全国高等学校デザイン選手権大会）」のように自分たちで課題を発見するコンペや、アイデアや思考を実際の形にする「プロジェクト・タンジブル」など、社会課題を自ら見つけ出して形にする取組みが一つの潮流となっており、教育現場でもこうした考え方が重視されつつある。

これまで「芸術文化」の振興に注力してきたが、「文化芸術」と「芸術文化」という言葉をあえて使い分けるべきほど、両者は異なる側面を持っている。歴史的・伝統的な分野の芸術がある一方で、試行錯誤を繰り返して新たに生まれるものもある。スポーツにおいて新競技が次々と誕生しているように、芸術的表現の分野でも同様の現象が起きている。今回あえて「アーツ」と表現しているのは、いわゆる「ファインアート」に限定せず、それらを含めた技術や表現のすべてを包含する意味合いを持たせているからである。

今 AI など、様々な文明の利器も入ってきて、社会自体も構造がどんどん変わろうとしているところをどうすくい上げればよいのかということを考えると、従来の「完全会員制」という組

織とは別のものを作らないと対応ができないだろう、という考えのもとに作ったのがこの ACT の概念である。先ほど、米田委員からもあったが、自発的な人なら誰でも登録してよいという話はありだと思うし、規定を守らないと破門するという話も違う。そういうのはもう既存の団体がある。その団体も含めて ACT に入ってくださいという話。はっきり言えば、富山県でそういったものを作れないかと聞いている。大抵の自治体は「大きすぎて難しい」という風になるが。

それから先ほどから出ている「会員になっていないと助成金はもらえないのか」といった懸念については、公募制にすればよく、我々がこれだけの予算を皆さんにチャレンジしていただきたいと問いかける母体になればいいだけの話。

従来の手慣れた行政手法で、今の激変しつつある現状を乗り越えようという考えについて、個人的には大丈夫なのかなと思っている。ではどうしたらよいか。県も長い間ずっと文化政策を進めてきたし、芸文協もそれはもう世界に冠たる活動をしてきていると思うが、そういった評価されるべき文化的素地が富山県にあるのならば、プロレベルにあるかどうかは置いておき、そういうものから学んだり影響を受けた人たちにも参加してもらえばよい。

そういったところがうまくいけば、時間はかかると思うが、門戸を広げた一つのプラットフォームとして、既存の団体、メディア、関係の学校にも入ってもらおうということはあるかと思う。

一例として、日本空間デザイナー支援機構という団体があるが、世界中からメンバーが増えていっており、発足から 1 年ほどでメンバーが 10 万人にもなっている。何か支配するものではなく、チャンスを作ってくれる組織で、教育機関は会費不要としている。そういった組織が求められている時代になってきたのかと感じている。

何かメリットを感じない以上、人は入ってこないと思う。例えば「定例会があるのは面倒だからいやだ」といった感じで。ACT をそういった定例会を持たせた組織にするのかどうかのほか、「そういった組織は屋上屋を架すようなもの」とか、「ルールを厳しくしたら誰も入らないだろう」等、皆さんには意見を出してほしい。

知事がキーワードとしてウェルビーイングのほか、「表現・芸術」を掲げているところに、せっかく今回の議論の場があるのだから、何か答えたいと思っている。

それなのに過去ずっとやってきた議論のようにして終わらせてしまうと、自身としては残念だと思う。行政がやるとなると失敗が許されない風潮があるが、全部人がやることだから、うまくいかなかったらもう一回考え直して作り直せばよいのではないかとも思う。ここはそういうことを覚悟するような場ではないか。これで答申を書くということが大事なかなと考える。もちろん、具体案は書き込まないと意味がないし、県の予算がどんどん増えるという形は明らかにありえないので、基金を作るかとか、自主財源をどうするか、そういうようなことまで含めて何か次なるステージに上げる答申にまとめられれば、知事も「分かった」と言うのではないか。何か反論や意見があれば伺いたい。

【事務局】

補足になるが、県として新しい文化計画を作成するにあたり、県民や文化芸術団体、アーティスト、市町村、企業を対象としたアンケートをとったところ、資料 2 の 11 ページ左端にある

ような課題が挙げられてきた。特に②の文化芸術団体からは、「情報発信がうまくできない」とか「活動資金が足りない」、「新規加入者がいない」といった意見があったほか、個人で活動するアーティストや作家からは、「発表の場が欲しい」とか、「作品を見てもらう機会がない」という声が挙がった。

そのほかにも、「企業の人に作品を見てもらい、それを飾ってもらえたらいい」といった意見もあったが、県としてもそういった情報をどう発信していくのかが一番の課題であると考えており、ACT が情報発信したい人と、それを見たい人をつなぐ場になればよいと考えている。ニーズとシーズがうまくマッチすればいい。「こういうことをしたいけど、誰に頼めばよいか分からない」といったニーズを、例えば ACT の掲示板に掲載し、それを見た ACT のメンバーが、「それであれば自分がやりたい」といった様に、ACT がつなぐ場になるのが一番よい。

また、TAC のメンバーには助成メニューを審査できる目利きの人になってもらえればよい。方向性としてはそのような形で進められればよいと考えている。

【長澤会長】

聞きたいこととリンクしているか。

【島添委員】

まだリンクしていない。

【長澤会長】

過去2回、審議会場で議論し、アンケートも追加で取ってもらったが、出てきた意見をまとめてみると、既存の芸術振興団体はあるが、何をやっているかいまいち分からないという意見が一意見としてある。例えば県民会館の前のウインドウにポスターがたくさん貼ってあるが、それを貼っているから広報になっているというわけではなく、現実的には広報のやり方を考えてく必要がある。

これまではハンドリングのしやすさもあって、団体を作り、その団体を加盟させるというやり方をとってきたが、今はもう個人の時代になってきている。また、よさこいなど、県外の人でも参加するようになってきており、そういったことを考えていくと、どの程度まで広げて、会員制にするかどうか等の制度設計は、答申に書き込んでおけば、それを受けて県はサイトや SNS をちゃんと整理することになる。

県は全県下の状況を把握しているわけではなく、市町村から情報を収集している。今回の ACT はそういった情報収集のターミナルにもなる。例えばクラフトイベントも呉西の方の活動は活発で知られているが、それは職能団体ベースで構造化されているということもある。呉東の方でもぼつぼつと出てきてはいるが、全県で見るとカバーしきれていない部分があるということ。こういった現状をカバーしないと駄目だということを、アンケートでは示されているのではないかと感じている。

【佐部利委員】

島添委員の一番の疑問は、アーツカウンシルを作る前提で議論するのかどうかということか。

【島添委員】

そのとおり。私は今回の会議がアーツカウンシル設置を前提としての議論だと思っていたが、そうではないような議論になっているように思える。それならば、まず「アーツカウンシルを作るか、作らないか」という形で答申をするかどうかの合意を取るのが先にあって、それで「作る」ということで合意が取れたらその次に、「どんな風にするかをどこまで具体的に答申に書いていくか」という議論になるということを今確認したところ。

【佐部利委員】

今の雰囲気としては、会長も述べられたような県の現状もあるので、「こういう形で作って動くのはどうか」という提案になっていると思うが。

【島添委員】

そうすると、「こんなアーツカウンシルは嫌だ」という意見や「このアーツカウンシルでよい」という様々な意見の調整が必要になってくる。

だから、こんなアーツカウンシルは嫌だというのであれば、どういうアーツカウンシルをつくればいいのかという議論になってくる。この素案が大筋で認められるかどうか議論の起点になると思う。

【長澤会長】

会長としては、委員の皆さんがそのあたりどう思っているのかが一番知りたい。だからこそ、たたき台という形で示した。そうでもしないと、何か他にビジョンや具体的な提案はあるか、という形の議論になってしまう。

【島添委員】

これまでの各委員からの意見を聞いていると、具体的にイメージができない部分があり、その点に懸念を抱いている人も見受けられる。

県からの説明も踏まえ、現在示されている素案に対して意見があるかというところは、一度確認した方がよいのではないかと。

【杉田部長】

一旦これまでの審議会について振り返らせていただきたい。過去2回の審議会では、「他県に設置されているアーツカウンシルという組織を富山県でも設けてみてはどうか」ということを議論してきた。それは、県が現在抱えている課題であるとか、時代の流れとかを踏まえて、富山県で作るとしたらどんなことが考えられるだろうかというところから、議論を出発したと考えている。

そういった議論を経て、現在は「他県のアーツカウンシルではこんな機能を持っているが、富山県でも作るとしたらどんな機能を持たせるのが適当か」というところまで論点が来ている。それをどうやって進めていくのかについて、イメージが人によってまちまちになるおそれがあ

ることから、長澤先生のアドバイスもいただき、今回イメージ図という形でお示したところ。具体的な制度設計はこれからだが、何となくこういう人たちが集まり、緩やかなネットワークのもと、具体的な事業として助成金、情報発信、相談支援といった事業を持たせたらよいのでは、ということを経験に落とし込んでみた次第である。

富山県としてアーツカウンシルを置いた場合に、どういう方々をカバーし、どういう機能を持たせていくのが適当なのかといった点を、委員の皆さんに議論いただき、方向づけしていただけるとありがたいと思っている。

【島添委員】

やはりアーツカウンシルを作ることは前提としてあるということか。

【長澤会長】

前提があって作るというよりは、「作らないと何もできない」という理屈である。

【武内委員】

過去2回の審議会があって今日の話であり、それを無視して話を進めると元の本阿弥になってしまうということを会長はおっしゃっているのではないか。

島添委員が言われた意見は、過去2回の審議会で言うべきだった意見ではないか。2回審議会が終わったこの段階でそういった意見があると、随分議論が戻ってしまうように感じる。会長がおっしゃったように、今回は、過去2回の審議会を踏まえてたたき台としてイメージ図を作成したがどうだろうか、と意見を聞かれており、その上での各委員が発言しているものと私は理解している。逆にこれ以外に案があるならばこの場で言うべきだし、ないのなら、示されたたたき台をブラッシュアップするような意見を述べるべきである。

【米田委員】

それではブラッシュアップするような意見を述べたい。概ね皆さんがこういったものが必要だという前提で、前向きな意見を述べられていると感じながら聞いていた。今回、私の意見として、資料1の6ページの方に、「高齢化、共生社会を見据えた文化施設における利用者目線の対応力の向上」ということを書かせていただいた。今回の文化審議会の方向性としては、演者など発表者の支援や育成だけではなく、文化醸成のための環境や、関係人口、文化施設やそこで働く職員も含め、文化芸術を支える人すべてを見据えての文化振興であるという考えに立ったほうがよいと考えている。障害者アートに取り組んでいることもあり、予てよりそういった考えを持っていた。

今回の部分も、文化芸術活動自身にも、県民・こどもがもちろん参加するし、活動・作品の鑑賞にも県民・こどもが必要。そこを増やしていかないと、発表者・演者がスキルアップしてもブラッシュアップしても、そこに繋がるパイプであったりとか、文化施設の環境だったりとか、施設で働く人たちの来場者に対するソフト面での対応力だったりとか、そういったものが醸成していかないと文化の隆盛には繋がらないのではないかと考える。県民全員が参加していくという方向性を考えると、ACTの存在は、発表者だけではなくて、例えば、アートイベントを

起こしたい企画側の人なども十分に入っていける場になると考える。

また、ACT は色々な芸術分野における課題を吸い上げたり、それを行政・県全体で共有できるような発信力を持つ場になる可能性を感じている。例えば今までは美術館等の文化施設で起きたハプニングや課題は、その施設や、施設を所管する担当部署に訴えるしかなかったが、そういった意見を一旦 ACT で吸い上げて、関係者で共有できる流れは多分今までなかったと思う。そういった意味で、ACT は大変貴重な場になりそうだと感じている。私がアーツカウンシルというものを、ちょっと勘違いしているのかもしれないが、ACT がそういう場になれば、富山県の文化を底支えるものになっていくのではないかと感じている。

【佐部利委員】

アーツカウンシル自体が、地域によって働きが違うので、今ひとつよく分からない存在みたいな状況はどこにでもある。イギリス、沖縄、横浜など、各地域で状況が違ったり関わっている人も違うので、そこに求められる働きは違ったりするので、そうなったときに、やはり富山ならではのアーツカウンシルがどういう形なのか。皆さんが言われているように、色んなことを考えたときに、アーツカウンシルのメンバーはすごく重要になると思う。

例えば、まちおこしをするのならプランニングやお金のこともできるような人も欲しいし、アートをやるのならアートのことをしっかり分かる人も欲しいし、アートのジャンルにもよるし、そういったところで、富山ならではの形が必要になる。

そこにしがらみとかをなくしたり、教育・福祉にも入っていくとなると、すごく考えることになると思うが、やってみる価値や可能性はすごくあるのではないかなと思う。

【内山委員】

話を聞いて、これをやったらワクワクするものになるだろうと感じた。

ACT に関わる人は、アーティストだけではなく、例えば、SNS 等で広報をするメンバー、イベント運営をするメンバーなど、アーティスト以外の人たちが関わるようになれば、アーツカウンシルがワクワクして面白いものになるキーワードみたいなものになっていくのではと感じた。

県民、子ども、教育、観光、まちづくり、それらを全部網羅していろいろできる場になると、本当に面白いものになるのではないかなと感じた。

あとはアーツカウンシルが、「こういう課題がある」だとか、「こういう楽しいことをしたい」というニーズに対して、「私ができる」とか、「こういう提案ができる」といった、自由なアイデアが出る場所になると、「堅苦しい富山」から、「富山には面白い発想ができる人がこんなにいっぱいいる」ということも見せられることになり、面白くなるのかなと思ってワクワクして話を聞いていた。

【藤井委員】

島添委員が疑問に感じられることは当然だろうと思う。それもやっぱり想定内なのだろう。この「ACT」の名前が変わってもいいという覚悟でこの議論をしていたと思う。私はいい言葉だと思ったが、疑問を持つ人もいる。

企業と芸術家たちは、現在関係性や繋がりを全く持てていない。しかし、今日示されたこの

図の中には、企業・経済界をつなぐというかたちがちゃんと書いてある。ここを煮詰めていけば、美術連合会だけの話ではなく、社会に美術というものを共有していくヒントや入口になる気がしている。

もうひとつ、美術連合会はこれまで何度か、県に対して、県の美術館で展覧会をやってほしい旨要請してきた。6～7年ほど前にも、県有施設での展覧会の開催を要請したが、「ここは貸しギャラリーではありません」と言われてしまい、結局現在は「3つのシンフォニー」という展覧会を、富山県美術館のTADギャラリーという会場で開催している。難しいこととは思いますが、大きな空間で展覧会をやらせてもらえれば、若い人たちがやってくる可能性は十分あると考えている。それを一つの形として、可能性があるものは、結構見い出せそうな気がしてきてならない。そういうことを議論していけば、アーツカウンシルがどうのこうのというよりも、何が本当に必要なのかということが見えてきそうな気がしている。

【武内委員】

私は経済同友会の文化芸術委員会を代表してきているが、今ほど藤井委員からも話があったが、文化界と経済界の関わりと言え、例えばホールで行う公演・発表のスポンサーになってくれという依頼があるだけというのが現状。

スポンサーになるからと言って、経営者がそこに興味を持って見に行っているとか、理解があるかという話はまた別もので、結局お金を出すか出さないかくらいの論議にしかになっていない。そういった現状もあり、経済同友会では経済人もきちんと文化に対する理解を深めようという取組みを進めている。

先日視察に訪れた豊岡市では、演劇によるまちづくりに関する講演を聞いた上で、現地視察に行き、演劇によるまちづくりに、経営者視点でどういう形で関われるか、経営者が関われる部分として、我々もしっかりと関わっていく必要があるのではないかなというようにことを経済同友会に対して提言もしているし、実際に理解を深めることに取り組んでいる。先ほど言われたようにその関わりというものを、もう少しお互いの相互理解のもとでつくり出していくことも必要だとすると、その場づくりというか、その一つのもの。アーツカウンシルというのはその場づくりなのかなと。結果的には、それを本当に求める人しかそこに関わることはできないし、救済する手段ではないと思うので、そういうものに興味・関心を持っていたり、求めている人がそこに集える場になるべきと考えている。

最終的には、誰のために何のために、なぜというところがいつもあると思うが、文化の表現者も、文化に携わる人も、それを享受する市民や県民も、県としての立場も、それぞれがよくなることを考える必要があると思う。ただしそれは救済措置ではなくて、それを本当に求めている人たちが、関わりたいと思っている人たちにとって、よくなる場を設けていくことだと考える。例えば文化に携わる方だったら、このアンケートにもあるように、何のために課題解決をしたいのか。なぜかといえば、それは県が掲げるウェルビーイングの向上ということになる。その中で、このアーツカウンシルがどういう役割を果たしていくかというところが、過去2回の会議を経ての、今回の一つの議題であると考えている。例えばアーツカウンシルが、経済界と文化界の交流のきっかけとなる場づくりという役割を果たせばよいと思う。

【長澤会長】

たたき台を示して、皆さんの考えを伺ってきたが、県・自治体が文化を振興したり、企業人が芸術に触れたりということは、世界趨勢になってきている。それは、行き詰まった社会を乗り越えていくときに、自発的に表現活動をするような人々が、何を考えてどういうパッションで生きているのかを学ぶべき、という考え方が根底にある。

そう考えたときに、富山にはこれまで培われてきた評価されるべき文化的土壌はあるが、その次のステージとして、我々は誰に対してどういう仲間ですらうしていくのかが、現状見えない。限られたある種の専門集団は見えているが、そうではない人たちはどうなのか。例えば、介護施設の中でのアート作業とか、病院の前に美術館のギャラリーカーが行って、展示を見せているというようなことが行われているが、そういうのを見ていくと、今まで我々が認識していた「芸術家」と呼ばれるような人たちとは異なる人たちの中に、ある芽生えが出始めており、そういうものをみんなで見に行ったり来たりできるような機運を醸成できればよい。そうすると「富山は結構面白い」といった感じで他県から人が来たりしてくれるのではないかな。例えば高岡のクラフト一番町は、名古屋の大学まで巻き込んでやっている。

そういったことを考えると、時代的に、今一番大事なときにこういう議論をしているものと感じている。従来のやり方で審議していくような時代ではない。富山県を次のステージに乗せていくための議論が必要である。何かを作るときには、作る前の議論が一番の本筋になる。今が大事であり、もう一回くらい審議会の回数を増やす必要もあるかもしれない。委員の皆さんも、今日の議論を持って帰ったらまた何かアイデアが出るかもしれない。ポジティブな提案型で、ご意見をいただきたい。もう一回くらい審議会の回数を追加することはできないか。

【杉田部長】

一回追加する方向で進めたい。

【長澤会長】

了承いただき、感謝申し上げます。ぜひアイデアをいただき、頂いたアイデアを事務局と協議し、理想論だけではない具体案を含んだ答申にまとめたい。

審議会はもう一回増え、それで答申に持っていくということで、今日の審議会は終了してもよいかな。

→（意見無し）

【西副知事】＜閉会挨拶＞

本日は長い時間にわたり活発に議論いただき感謝申し上げます。会長から、作る前の議論が重要とあったが、本当にそのとおりだと考えている。また、会長から委員の皆さんあてに、ポジティブな提案型で意見が欲しいとあったが、ぜひ意見をいただけるとありがたい。

本日、委員の皆様もウェルビーイングに言及されており、総合計画の基本理念でも打ち出したということもあり、念頭に置いてもらえていると感じた。文化芸術は本当にウェルビーイングに直結してくるものだと考えている。

先週、県の成長戦略会議である「幸せ人口 1000 万実現会議」を開催したが、安定を誇る富山県ではあるが、「投資家は何が起こるんだというワクワク感にお金を投じる」といったように、本日と同じような議論が行われた。今まで富山が培ってきた歴史と資産を次のステップにといったように、この成熟社会で新しいものを作ることになると、そういった方向に進んでいくのかと、先の会議と本日の会議、両方出席した私としてはそういった印象を受けたところである。

富山が今誇る様々な資産の上にさらに成熟した社会でどのように文化芸術を位置付けていくかを議論するにあたり、審議会の回数を増やしたい。忌憚のない、活発な議論をいただければと思う。